



## 巻頭言

### アイジーエスのエス (IGSのS)

IGS 理事 赤木 俊允

海外では国際ジオテキスタイル学会(IGS)が、そして国内では土質工学会内にジオテキスタイル委員会が設立されたのは1983年、それに続いてIGSの日本支部が発足したのは1985年であるから、一連の胎動・誕生の時期から既に10年の歳月が経つ。1992年末現在で、IGSは個人会員が1241名、法人会員48社、準法人会員7社、支部が9ヶ所で設立されるに至っている。我が日本支部は個人会員が163名、法人会員が20社であるから、IGSの中では一大勢力を形成している(学生会員69名中我が国は41名)。しかし、学会としては依然まことに小さなものに過ぎない。

昨年11月福岡で開催されたIGS理事会の議題の一つとして、IGSのGを織布や不織布を前提に作られたジオテキスタイルという言葉から、もっと守備範囲の広い新語ジオシンセティックスに変える必要性が議論され理事会案として承認された(本誌92年12月号25ページ参照)。全会員の郵便投票による最終決定までにはまだ一年余の時間があるので、今後国内においても大いに意見が交わされ、本誌上でもジオテキからジオシンへの推移とその意義が議論されることになろう。

今回ここで申し上げたいのはIGSのGではなくSについての所感である。今更言うまでもなくSはSocietyであり、学会と訳されている。とかく我が国では、学会の「学」の字に力が入りすぎる感があるが、欧米におけるsocietyには、academic societyとprofessional societyとがあって、土木学会の類を含め大部分は後者に属すると言ってよいであろう。Professional societyは本来、プロフェッショナルと称する専門家の集団であり、責任を伴う実務経験が重視され、学歴・研究歴だけでは十分な会員資格とは認められないプロ集団のことである。その点筆者などはIGSのようなグループを単純に学会と訳して事終われりとすることに一寸拘りを感じている。

IGS日本支部が学会であるための努力として、毎年研究発表会を開催して関連研究の振興・推進を計る、内外の専門家による講演会を開いて最新情報をもたらす、講習会を催して関連知識の普及とPRを計る、本誌のようなニュースレター的会誌を発行して技術情報の浸透と会員間のコミュニケーションを促進する、またIGS本部との連絡を密にし理事会に代表を派遣したり国際会議への参加を奨励したりすることにより国際的な活動の連携を深める、といった活動を繰り広げていることは御承知の通りである。

実際考えてみると、僅か163名の会員中の誰がこれだけの仕事をこなしているのか、

と不思議に思える程である。それだけではない、さらにジオシンセティックス関連の規  
準やマニュアル作成の作業、各種の共同研究が、IGS 日本支部の直接・間接の関わり  
の中で遂行されつつあるわけであるから、驚く他はない。創設以来の支部長である福岡正  
巳教授の強力なリーダーシップによるものであることは言うまでもないが、比較的小数  
の役員・幹事諸氏の献身的な奉仕、それに事務局をサポートしてくれている土質工学会  
の協力とによって可能となっていることをまず指摘しておきたい。些か面映ゆい言い方  
になるが、こんなにちっぽけな学会が何をしてくれるのかではなく、学会に対して何を  
貢献してやろうか、という積極的な参加意識を会員諸氏に一層期待したいのである。

それはともかく学会を名乗るからには、ある程度ハードな面を持つこともまた止むを得  
ない。しかし、多岐にわたる職種の技術者・科学者やセールス・事務系の専門家達を含  
め、肩を張らずもっと自由に職種間のハードルと縄張意識を超え、ジオシンセティック  
スに些かでも関わりを持つ人々が直面する問題なら何でも持ち込み一緒に考え、且つ将  
来に夢を抱かせるようなトピックスを育てることが出来れば、と夢みたりしている。

夢と言えば、筆者が委員長を仰せつかっている土木学会の「土構造および基礎委員会」  
にはいくつかの研究小委員会があり、その中にはジオシンセティックスに若干関係ある  
ものとして、「舗装に関する研究小委員会」と「Landfill による新しい水辺空間創造  
研究小委員会」がある。前者には、舗装断面の各層を補強するためのジオグリッド使用  
の可能性やリフレクション・クラックの問題についての検討も含めるようお願いしてあ  
る。後者には、この数年間取り組んできた「ウオーターフロント開発」という大きなテ  
ーマから、最近のジオシンセティックスの新技術の一つの前提に絞り込んできた話題で、  
次のような夢を追うプロジェクトのフィージビリティ・スタディをお願いしてある。

1990年筆者がニューヨーク市を訪問した際に、その夢の島であるフレッシュキルズ  
のランドフィルを訪ねる機会を持った。ここではゴミと残土とをサンドイッチ工法で積  
み上げ、最終的には高さ500 ft 程度の小山にする計画である。一方、我が東京湾の  
ゴミ捨て場はかなりな面積を占拠しているにも拘らず、海面上数米の平らな島が出来上  
がると満杯だ、満杯だと騒ぎ立てるだけに留まっている。ここらで一つ発想の転換を計  
り、500 ft と云わず500 m 位の高さの山を造成するべく、ゴミと建設残土とを  
交互に積み上げて斜面を緑化し、ゆくゆくはケーブルカーを設置して関東平野の全貌が  
見渡せる展望台でも作っては如何、といったワイルド・ドリームの提案である。

かくて何十年分かのゴミ問題が一挙に解決するのみならず、真っ平な関東平野の中では  
用途の多い地形的なアクセントとなり、香港島並の夜景が素晴らしいアトラクションに  
もなろうというものである。羽田・成田を発着する飛行機の邪魔にはならないか、など  
は割合簡単に答が出そうである。しかし、地域的な気象の変化をきたす可能性を含め、  
東京湾の環境に及ぼす影響については慎重なアセスメントが要求されよう。土質工学的  
課題としては、建設中に山が変な壊れ方をしなければよいわけで、沈下はいくら起って  
も構わない。人工島の安定に関する問題、また汚水の浸出やガス・熱の発生などに対し

では、各種のジオシンセティックス材料をふんだんに活用して安全と効率化を計る。

またこのような人工島は20世紀の貝塚として計画的に残すこととし、今はリサイクルの出来ないゴミを後世の科学技術に托して貯蔵しておくという考え方としても意義がある。といった具合の「塵も積もれば山となるプロジェクト」について只今、嘉門京大教授を小委員長とする一団の若い土木技術者達が、ジオシンセティックスを肴にその英知と情熱を傾け、未来への夢を描こうとしているところである。御期待を乞う。

学会と呼ぶ以上は未来に通ずる夢が欲しい他に、学会ならではの活動も実現して行きたいところである。昨春来、日本支部の若い技術者諸氏との話し合いの中で、欧米の各種ジオシンセティックスの用途別使用量などに関する調査は割合行き届いているように見えるのに、我が国のジオシンセティックス業界に関する統計は著しく貧弱であることが話題となった。現存のデータは、数年前通産省主導で行われた調査結果と、1988年頃ある外国の業者に依頼して実施された調査の報告書が存在するだけである。

そこで学会でなければ出来ないプロジェクトとして、約一年前から本誌編集部で企画を始め、昨秋ジオシンセティックス材料を製造販売する各社にお願いする運びとなった使用量に関するアンケートの件がある。どの産業においてもまず基本となるのは生産量、販売量、使用量などの統計である。このような基本統計が整備され公開されていることは、先進国たることの必須条件である。筆者は計らずも昨夏 IGS 理事に選出されて以来、特に外国の人々から我が国のジオシンセティックスに関する統計量を聞かれることが多く、知らないでは済まされないケースが増えてきている。古くて貧弱なデータしかない、ということが国際的にどんなに恥ずかしいことであるか、痛感させられている。

アンケート案の作成や発送先の選定等については何回も会合を重ね、特に数名の若手幹事諸氏の努力に負うところが多かったわけであるが、各社から返送して頂いたデータの集計処理についてはあくまでも機密扱いとし、不肖筆者が責任管理している。目的は日本全体の各種ジオシンセティックス材料の用途別使用量を掴むことであり、回答をお願いした各社のシェアや動向を探ろうとするものではない。

調査方法については色々なものが考えられたが、結局アンケートを通じて関係各社に直接質問するという極めてナイーブで単刀直入な方法を選ぶこととした。我々には間接的な推計方法で信頼できる結果を得る自信はなかったし、信頼関係に基づく直接法が最も誤差の小さい答を与えてくれる筈だとの期待と楽観があったからである。幸い大部分の会社からは既に満足すべき返事を頂いているが、中には少数ながら取扱量は丸秘で外部には出さないと主張される会社もあった。前述のように、頂いた回答については完全な守秘態勢をとるということで了承と理解とを得つつあり、有効なアンケート回収率に到達する迄後一步という最終段階に入っている。ここまで来た以上は何としても所期の目的を達成したい、いま一層の御支援と御協力をお願いする次第である。

この調査が成功した暁には、協力頂いた会社名と集計結果とを本誌に公表する予定である。勿論各社からの回答は絶対に漏らさない方針であることを、ここに繰り返し述べ再確認しておきたい。関係者の理解と協力さえ得られれば、この一番簡単な金のかからない方法が、最も信頼度の高い調査結果をもたらすことは明白である。初めての試みだけにすべての始動抵抗を乗り越えることは簡単ではないが、次号では集計結果の発表が出来ることを期待している。

アメリカの色々な専門家のグループでは、ピアレビュー(peer review)の制度が普及している。直訳すれば同僚による査定ということになるが、専門家の評価は同じ分野の専門家でなければできないという認識が具現した制度ということができる。専門家集団内での閉鎖的な馴れ合いを排し、専門家同士でその真価を認め合うと共に、改めるべきは相互に指摘する、そのような信頼に基づく切磋琢磨が専門家としての社会全体に対する責任であり倫理であるとするのが、プロフェッショナリズムと称せられる彼らの誇り高い伝統である。ピアレビューは、アメリカとは大分異なる趣きのものになってはいるが、我が国でも種々の表彰制度や審査制度といった形で実現されている。

欧米ではプロである専門技術者は、所属する学会を通じ己れのプロフェッションに対する忠誠を誓うことが要求される。転職が完全に自由であり基本的人権である彼等の世界では、たまたま勤めている会社は仮の宿に過ぎないから、愛社心なるものは決してそれを超えるものではない、ということになる。一方我が国では江戸時代からの伝統であるお家第一主義の滅私奉公がまずあって、専門家といえども勤め先の方針に対しては、それが如何に理不尽であろうと反社会的であろうと絶対服従以外はない、ということになる。国際化が急速に進行する我が国においても、多くの若い技術者達が前者の考え方により大きな共感を抱き、後者の伝統に凝り固まった旧世代に対して些かシラケを感じていることは、時代の趨勢と云うものであろう。

やや脱線したが、筆者が言いたいのは、学会とは本来プロの集団であるということである。個人ではもとより、一社、一企業では出来ないことを実現させ、プロフェッション全体の利益とレベルアップを計ることを目的とするものである。例えば、我が国において各種のジオシンセティック材料がどのような用途で年間何万平方メートル使用されているか、といった情報を、お上の御威光を借りるまでもなくまた外国の専門業者に依頼するまでもなく、我々自身の手で調査することの必要性を疑う人はないであろうし、また我が国がそんなことも出来ない程の後進国であるとは思いたくない。その程度のこと出来なくて何の学会ぞ、という思いも出てくる。

今回は編集委員長の不手際により、不肖筆者が急遽巻頭言を執筆せざるを得ない羽目となり、かくて通常の格調高い巻頭言ならざる長舌の駄弁を弄する結果となった。そこはお互いプロ同士のこと、意のあるところを汲み取って頂きたくお許しを乞うと共に、上記に対する忌たんなき御意見を本誌編集部へ寄せて頂きたいと期待している。

(以上)